是を割愛する。顧るに本宗の布教は從來他宗に比して必らずしも優れりと斷ずべからず。是固より本宗の特質に起因する處なきに非ざれども一は布教の實質要件を會得するもの少きにあらざる歟。今後布教に志さんとする者は這般の消息を探究して、能く萬全の策を立てざるべからず。その些細なる事項に關しては各自の研究に俟つもの多し。予が示す處は只月をさすの指に過ぎず髓を得んとするものは須く實參實究せよ。

以上

本宗儀式の沿革と其の批判

來馬琢道

一

私が宗門の儀式を研究するに至つた動機は從來の知識又は戒師の人々が、斯樣な時に斯の如く進退すべきものである、あの樣な事をするのは非法であると云ふ敎へ方をして居るが、何故に斯くせねばならないか、又は斯くしてはならないかと云ふ理由を說明して呉れる者が無い。或禪師が授〇の指南をする時に、衲が珠數を磨つたら、戒弟に三拜せしめよと云ふ簡單なる約束をして、それで儀式が完全に進行するものと考へて居る者もある。宗門の叢林家と云ふ人々は大別して之を理論家と實際家とに分ける事が出來る。理論家と云ふのは書物の提唱をしたり講義をしたりする者の一部であつて、實際家と云ふのは本堂又は僧堂に於て儀式を行ふ者を云ふ。而して實際家の方は常に理論家を嘲つて彼はあれ程の議論をするけれど、も實際法堂に出たら何も出來るものではない、法堂の事は吾々の方が長者であると云ふ。而して理論家は從來之に向つて駁論を弄した事を聞かないが、理論家の方は貴方々は唯形式の儀式を行つて居るだけで宗乘は私の方が知つて居る、威儀、即佛法ではあるが、宗乘が解らなければ儀式が解らないではないかと云

ふ考へを何れも有つて居たやうである。私は幸ひにして多少の學問をさせて貰つた、又西有禪師や日置禪師に就き坐禪を行ふ事や法式を勸める事を敎へられた。又私の周圍には多數の授戒通があり、法要通があり、聲自慢の人があつて、それ〴〵私に色々な事を敎へて呉れた。私は謹んで之を聞いて居たが、段々眼が開いて來るに從つて儀式に對する信念が危くなつて來て、何故に斯樣な事を行ふのか、又斯樣な事を行はなければ佛祖の敎へに背くと云ふのかと、に疑ひを挾んで來た。是に於て私は禪宗の儀式に關する研究を自分の一生涯の研究題目の一つにしようと考へた、勿論之は(禪門寶鑑)と云ふ書物を著はす事の必要に迫られたからでもある。其(禪門寶鑑)を著はす事になつた動機は、私の師匠の遺稿を調べて見ると、隨分苦心して色々な事が書き留めてあるが、其書いてある文字が大分違つて居るやうである。之は耳から入つたもので、眼から入つたものでないから自然間違つた事であらうと思ふ。それでも私の師匠は仲々研究心もあり向上心もあつたので、之だけの機會を作つて置いて呉れた。之を此儘反故にするのも惜しい何とか使ひたいと云ふ希望を懷いた、之が『禪門寶鑑』編纂の趣旨であつた。然る處そんな不完全なる記錄を自分の著書とするのは聊か著者としての道義に反するものゝやうに思はれて來たので何とか纏つた書物にしたいと思ひ、茲に色々な原因が集つて儀式研究の道程に上らざる事を得なかつたのである。

二

曹洞宗と云はず佛敎の儀式が風俗の變遷に依つて供養のやうなものになつて居る一つ二つを擧げて見たい。曹洞宗に於いて常に用ひて居る座具である。之は各宗共に左程重く用ひないやうである。淨土宗でも使ふが、曹洞宗程に尊重して居ない。禮拜する時に一寸前に置くだけのものである。然るに本宗に於ては大層鄭重に之を取扱つて居る、從づて其使用法に就いても疊んだ儘で前に置いて、禮拜する時は頓拜と云ひ、大きく展げる時は大展何拜と云ひ、三つに折る時の事は單に展座具と云ふ。又兩手に持つて先方を揖するのを提座具と云ふ。上堂の時に侍者和尙が堂頭和尙の座具を持つて廻はる時などは仲々威張つたもので、其進退が惡いと參列者が或は之を笑ひ或は之を叱すると云ふ位

である。宗門に於てはそんなに座具は大切であるが、抑々座具とは何に用ひるのかと尋ねて見ると、今日の曹洞宗寺院に於ては殆ど必要品と思はれて居ない。然るに印度の方に行つて見ると、此座具は絶對的必要品である。佛敎徒は佛殿に行つて禮拜する時に、着て居る着物を汚さないやうに座具を敷かねばならない。日本では疊を敷いた本堂の中で禮拜するのであるから、袈裟が汚れると云ふ事は殆ど考へて居ないが、印度のやうに泥の上に跪いて禮拜する事になると、何うしても座具がなければならない。此場合に於ては展座具と云ふ三つに折るやうな事を全然許されないで、必ず大展でなければならない。座具の上に乘つてしまつて、體全體を座具の中に入れて禮拜する。日本のは段々幅が狹くなつたが、印度のは幅が廣い。殊にマホメット敎の信徒などは、西の方へ向つて禮拜する時に、必ずしも佛敎の座具の樣なものでなく、一枚の風呂敷の上に坐つて禮拜する。座具は獨り佛敎ばかりでなく、マホメット敎徒にも必要である。私は印度に行き、セイロンに行き、ビルマなどに行つて敬虔なる信者が庭の內に建つて居る塔に對し土の上に座具を用ひて叮嚀に禮拜して居るのを見て、成程之が座具の用ひ方であると云ふ事を初めて見た、(斯んな事を初めて知つたと云ふのは恥しいやうに思ふけれども、實際座具と云ふものは斯の如き場合に用ひるものだと云ふ事を確信する事が出來たのは此時からである。(次に支那の諸刹を訪問すると、佛前に於て法要を行ふ時に普通の僧侶は三拜すると云うても、座具を用ひて參拜しない棕梠繩を編んで作つた高さ七八寸直徑一尺五六寸の圓座がある、其に腰掛けてお經を讀んで居て、禮拜する時には圓座の上に膝を突いて禮拜の眞似をする。其時幾分か床の上に法衣や袈裟が障るけれども比較的掃除が行き屆いて居るので左程法衣や袈裟を汚さないから餘り氣に止めても居ない。併し大導師の法衣や袈裟は相當見事なものであるから、座具を敷いて之を保護して禮拜する事になつて居る。日本の寺院に於ても佛殿を支那風に建てゝ居る處では中央に板を置いて、其上に拜席(はいしき)を置き、其上で導師が座具を展べて禮拜する事になつて居る。併し此時は二重に保護した事であるから座具を敷いて泥の着くのを防ぐと云ふ必要が無いので、三つに折つて用ひて居る事が多いやうである。私の少年時代に丘宗潭老師が私の師寮寺へ來て後堂になられた事があるが、其時に『七十五法記』の講義をする、吾々と共に參拜すると座具を二つに折つて禮拜された。之は丘さんの家風

なりと思つて居たが、今にして考へると、座具を二つに折れば法衣に障る側に泥が着く譯であるから、印度などでは絶對に許す事の出來る事ではない、寧ろ三折の方が幾分か道理があるやうである。座具一つの事でも研究すれば此位異論が沸いて來るのであるから、其他の一切の儀式に就いて研究すれば相當面倒な議論も出て來る譯である。又極めて簡單な事であるが、一言諸君に云うて置きたい事は、曹洞宗の伽藍の名稱である、佛殿とか、法堂とか、客殿とか、方丈とか云ふ語は、何人も不用意に使つて居るが、今日佛殿、法堂、客殿、方丈の四棟を持つて居る寺は殆ど無い。曹洞宗では兩本山があるだけで、諸堂の調つて居る寺院は先づ無いと云つて宜いと思ふ。然るに方丈とは何であるか、客殿とは何であるか、本堂とは何であるか、法堂とは何かと尋ねると、可なり其答辯に苦む者が多い。今日の各寺院の本堂を客殿と云ふのは何故であるか、之は其寺の方では本堂と思つて居るけれども、建築樣式から云へば、法堂でも無く佛殿でも無く客を接待する場所であつて、即ち表方丈と名くべきものと思ふ。鎌倉の圓覺寺などへ行つて見ると、中央が板の間になつて居て、緣に疊の敷いてあるお堂がある。今日では可なり不便であるけれども其を方丈と名けて、正面に佛間があつて、何かの法要を其處で行ふ事にして居る。之は佛殿でもなく法堂でもなく、お客が來た時に祖堂の前に於て賓主共に禮拜する所の大切なるお座敷として居るので、之を客殿と名くるものである。方丈は之と同じ建物であるけれども、中の方にもう一間あるのが方丈で、客殿を表方丈と云つて居る者もある。今日の曹洞宗の本堂は佛殿と法堂とを合せたものと云つても宜い。又大間の中の柱の名が何だか分らなくつて、面山和尙は大光柱と云つて居るが、斯んな字は外にないやうである。私の考へでは淨土敎に於ける來迎柱と云ふのを禪宗的に當字を作つたのではないかと思ふ。若し誰か此柱の名稱に就いて典故を知つた者があつたら聞きたいと思つて居るが、今日までの所では誰も明答を與へて呉れない。本所の震災記念堂の設計が問題になつた時に伊東忠太博士の設計圖に正面の入口を向拜と書いてある。私が其時に各宗の幹部に向つて私の記憶する所では迎拜では無いかと云つたが、多數の人々は、其は向つて拜するから向拜でよいと云つたので其儘になつて居るが、今考へて見ると、來迎を拜すると云ふので

迎拜と云ふ語が出て來たのでは無いか、斯んな事でも一々研究すると隨分危い事がある。

三

曹洞宗の法式は日分行事、月分行事、年分行事の三種に分ち之を定期法式と名ける。別に臨時法式あり、其外に特殊法式と名くべきものがある。寺院に依つては月分行事と年分行事とを規定通り行はない所もあるが、之を勵行して居る所では其寺の開山忌又は其寺の中興の住職の月忌、時としては先代の月忌等を勤むるを常とする。年分行事に至つては個々に大般若會、大施餓鬼會等を行ひ、時には鎮守大祭を行ふ等の事もあるから、年分行事は相當複雜なものとなつて居る。臨時法式と云ふのは開山の三百五十回忌とか、先住の十七回忌とか、放生會とか、檀家の佛像石碑の開眼會とか、檀家の爲に特に行ふ大布薩、大施餓鬼會等を呼ぶものである。特殊法式と云ふのは晋山式、授戒會、法地寺院に於ける結制及び之に附隨する各種の法要、得度式、住職茶毘式等を云ふ。其他病人の爲に大般若祈禱會を行ふとか、戰死者又は社會公益の爲に死んだ人の爲の追弔會擧げ來れば種類は多い事であらう。之に就ては大體『禪門寶鑑』に掲げて置いたから其方を參照して貰ふ事にしよう。

四

一言此處で加へて置きたいのは行事と云ふ文字である。世間では行事と定めて居るが我宗に於ては『正法眼藏』に行持の卷がある如く行持と云ふ方に重きを置いて居るので、『行も亦、坐禪も亦禪』と古人も云うた如く、寢るのも行持であり起きて顏を洗ふのも行持であるとしてあるから、單に何々を行ふと云ふ意味でなく、坐禪する積りで總ての事を行ふと云ふ意味で、朝讀經する事を行持を讀むと云うて居る。さあ行持が始まるから出ないかと云ふのは朝課諷經が始まるから出掛けろと云ふ事であつて、行ふ事とは少し勝手が違ふ、併し普通使ふ時には日分行事、月分行事と云ふやうに『事』の字の方を使つて居る。『洞上行持軌範』の行持は文字の示す通り宗門の僧侶が行ふ事を總て行持と名ける。密敎の僧侶が佛前に於て行ふ事を作法と名けると似たものであるが、佛前ばかりでなく『喫茶喫飯盡く是報恩の行持なりと』云ふ信念から其意味で行持と云ふ字を解釋して置く事が必要である。

五

日分行事と云ふのは、朝起きて顔を洗つて坐禪をして朝の行持を讀む事から夜坐禪をして寢るまでの事を云ふのであるが、其朝のお經の事でも『洞上行持軌範』の定る前は、各寺院に於て樣々の法式を行つて居たのである又諸叢林に於ては一層樣々の事を行ひ、太祖の時代頃まで遡ればもつと變つた事を行つたやうである。昔は粥了諷經と云つて、朝の御飯を食べてしまつてから佛前で樣々な御經を上げたもので、今のやうに讀經すると云ふ事は無かつた。最近は皇靈諷經を勤めるが、『行持軌範』の改訂せらるゝまでは最後の蓮經の中に本朝人王歷代皇帝各々神儀と云つて御回向申上げたものだが、今日では大悲心陀羅尼を讀む事になつた。それから總持寺に於ては大悲心陀羅尼を六遍も讀んで、高祖其他の方に御回向した事もある。其の朝課の行持があれまでに纏まるのには相當時間を要したものである。

六

第一、名稱を調べて見ると、初の讀經を朝課佛殿諷經と云うて居るが、一般寺院に於て佛殿と法堂とを持つて居る所があつても、特に佛殿で讀む者は少い。多くは法堂で讀むやうである。本山でも佛殿諷經の方は大衆が佛殿だけで濟ませて、應供諷經以下を法堂で勤める場合もあるやうだ、兎も角佛殿諷經となつて居る。然らば此佛殿諷經は誰に向つて回向するかと云ふと、『眞如實際に回向し無上佛果菩提を莊嚴す』とある。釋迦牟尼佛とも文珠菩薩とも普賢菩薩とも云はない。茲に曹洞宗の特色の一部が現はれて居る。併し讀む經文は觀音普門品と大悲心陀羅尼と消災妙吉祥陀羅尼で、前の二つは純然たる觀音關係の經文である。後の一つは其名の通りである。故に觀世音菩薩を讃歎する經文を以て眞如實際に回向すると云ふのだから、細かく論ずれば面倒な理窟も云へる譯である。次に應供諷經と云ふのは羅漢に對する回向であつて、羅漢は永く此世に留まつて佛法を皷吹する誓願をした佛弟子であるから、其方々に向つて讀經して其加護を願ふのである故に昔は行持が終つてから羅漢拜とつて、十六羅漢の外の眷屬の數を唱へて鄭重に禮拜したものであるが、今は之を略して回向文だけで終つて居る。此時に讀む經文は般若心經であるが、之は觀音菩薩の說法を錄したものであるから、觀音の信仰と云うてもよい。但し般若の空門を說いた經文であるから祈禱の意味が

ある事は勿論である。之は佛弟子に向つて寺の繁昌を願ふもので、十六羅漢、五百羅漢の常に此世に在つて佛法を擁護する事を確信し、之に一切の祈禱を捧げるもので、曹洞宗も之で終つてしまつて居れば至極單純であるが、仲々此御祈禱だけで終らないで般若會上十六善神や、藥師十二神將や、稻荷さんや、其他印度支那傳來の神のやうなものを祭るので大分複雜になつて來るのである。若し應供諷經に總ての祈禱方便を任せてしまふやうになつたら、曹洞宗の儀式は大分手輕になる事であらう。

七

其次が釋迦牟尼佛から自分の寺の開山の前までの方々に報恩の法要を行ふので祖堂諷經となつて居る。本來大衆一同が祖堂に上つて讀經し回向すべきものであるが之も大抵の寺院では祖堂に行かないで、法堂に居た儘で讀經して住職だけが祖堂に行つて献香禮拜して來る事が多い。之に就いて五十七佛と云ふ稱號なども誰が定めたものだか一寸直して置きたいが適當な名稱が見當らない。次に開山堂諷經であるが、祖堂と開山堂と分れて居る所は少いのだから、一所でもよいと思つて居る人があるだらうが私の考へでは普通の寺院に於て祖堂と云ふのは本尊に向つて左の方にある達磨大師の木像が代表して居るものであらう。釋迦牟尼佛は中央の本尊であり、達磨大師は支那の初祖であるから支那の祖師は達磨大師に依つて代表せられ、又開山堂に高祖太祖の木像及位牌を安置するのは初から祠堂と開山堂とを一所にしたもので、祠堂諷經と開山堂諷經を別にすると、可なり面倒な事になる。總持寺に於ては佛殿に洞山悟本大師が祀つてあり、天童如淨禪師も祀つてある。普通の寺院に於ては達磨大師と洞山禪師と天童如淨禪師と高祖と太祖と一所に祀り、之を祖堂と名け、當寺開山以下の位牌を安置した所を開山堂と名けるのがよいと思ふが、そんな伽藍のある所は少いやうである。依つて住職が其お經の時に適當のお堂に行つて献香禮拜して歸つて來る事に依つて祖堂諷經、開山堂諷經を行つた事にして居るやうである。永平寺の承陽殿に拜登し叮嚀な承陽殿に於ける讀經を見て誠に有り難く思ふが、私共はもう少し茲に意義ある方法を採りたいと考へて居る。

八

次に皇靈諷經である。之は前にも云つた通り從來なかつたものを最近に入れたのだが、歴代皇帝神儀のお位牌は何處に置くものであるか、普通の寺院に於ては本尊のお厨子の中に置いてある所もあり、開山堂に置いてある所もあり正法七郎大權現の側に置いてある所もあり、位牌堂に置いてある所もあるが、私の信ずる所を以て言へば、位牌堂に別席を設けて安置するのが最も善いと思ふ。從來德川氏の位牌を位牌堂の一部に鄭重に奉安して置いたのであるから祠堂の中央に本尊が安置してあるなら其本尊の側に安置するのがよいであらう。若又本尊が無いやうなら、當山亡僧の位牌と列べて置くのも策であらう。故に住職は皇靈諷經の時にも亦祠堂へ行つて献香すべきである。若し遠くて困る所は遙拜して置く事もあらう。

九

次が祠堂諷經であるが、私が此間に一つ疑問として居る事がある。從來の讀經の儀式に依ると、祠堂諷經の前に磬子を一つ打つて、之から祠堂諷經を始めると云ふ事を知らせる法がある。他のお經の時には磬子を打たないで、直ぐに次のお經を始めるが、祠堂諷經に限つて「モコホジヤホロミ」が終つた所でゴーンと一聲鳴して、それから押へてお經を始める事になつて居る。或は位牌堂が遠いので其方に合圖するのか、又は參詣の客があるので其お客を案内する爲に特に時間を與ふるのか、大衆一同揃つて祠堂まで行くので時間が掛るから、其意味で一つ磬子を鳴すのか、一寸明答出來ない。從來の尊宿は祠堂諷經の前に磬子を一つ鳴すものだと敎へるけれども何故と言ふ事は敎へない。私は此磬子を一つ打つのには何か意味があるものと信じて居る。まだ斷言出來ないが誰かに敎へて貰ひたいと思ふ。次に祠堂諷經に讀む經題である、今日では如來壽量品の偈を讀んで居るが、昔は法華經を暗誦する都合上からか、或は法華經を讀みたいけれども、一日の中には讀めないと云ふ爲めか、二十八品の法華經を安樂品外一品を二つに割つて三十日分に分け、一日から一品宛讀んで行くやうにして居た。毎月暦をみて二十九日の時には安樂品だけを二つに割つて、後全部を一日に一品宛讀んだ事もあらうし、二月の二十八日の月には初から一品宛讀んだのであらう。依つて之

を略稱して妙法蓮華經の蓮の字を取り蓮經と言つて居たが、之は俗稱であつて、檀那諷經とか祠堂諷經とか位牌堂諷經とか云ふのが實際に合つた語であらう。其祠堂諷經は俗人の爲にのみ讀むものかと云ふに、さうでなく當山亡僧が入つて居るから、未だ住職せざる者の其寺で逝くなつた者は皆亡僧の仲間に入れられるのである。此祠堂諷經の回向の時に「合山の清衆六親眷屬」と讀んで居る人があるが、之は大變な誤りである。合山の在員の六親眷屬に向つて回向するのが、今山内に二百人雲衲が居れば、其雲水の六等親までの伯父、伯母、曾祖父、曾祖母のやうな者を一々擧げられないが、何千名と云ふ者に回向すると云ふので、雲衲は毎日自分の近親者の死亡者に對してお互ひに回向して居ると云ふ誠に有り難いお經である。若し「合山の清衆六親眷屬」と讀んでしまつたら誠に意味の分らない事になる。深く注意を要すると思ふ。

一〇

以上で朝課諷經が終り次に日中諷經であるが、之も昔は典座寮で御飯が出來た時に讀むだけのお經で、合山清衆が佛殿や法堂に集つて勤めた事ではなからう。併し勤めるのも結構である、唯私共は其回向文を讀んで見て朝と同じ事を一つに纏めてしまつたものゝやうな感がある。晩課諷經も至極結構であるが、是等に就いては特に說明する必要も無いやうである。月分行事以下臨時法式、特殊法式等に就いては追て解說する事もあると思ふが、私が特に云つて置きたい事は、禪宗の法式は茶道と同じく必要から出た事である。それを形式的に見てしまつて居るのは甚だ遺憾な事である。依つて現代に禪宗を活躍せしめて行くには新しい儀式を作つて行く必要がある。時計の無かつた時には常香盤を置いて香司の役が重大なる任務であつたが、今は時計が出來たのであるから常香盤も香司も要らなくなつた。支那では皇帝萬歲の文字が寺の屋根に揚がつて居たが、今は民國萬歲と書いてある。是等は吾々の豫期す可らざる不祥の變化であるが、禪宗の儀式は決して無用の煩雜を求めるものでなく、實用主義に出發したものであるから、其積りで變化して行く事が必要であると云ふ事を記憶して貰ひたい。一々の批評をして居ると限りが無いから此邊で一應打切る事にする。